

蘭陵笑笑生について

日下, 翠
関西大学

<https://hdl.handle.net/2324/16091>

出版情報 : 東方. 40, pp.20-23, 1984-07. 東方書店
バージョン :
権利関係 :

蘭陵笑笑生について

日下 翠

『金瓶梅詞話』の欣欣子の序には、「竊に謂う、蘭陵の笑笑生、金瓶梅伝を作り、意を時俗に寄するは、蓋し謂あるなり、と。…中略…吾れ故に曰わく、笑笑生この伝を作るは蓋し謂う所あるなり、と。

欣欣子、明賢里の軒に書す。」とある。

この、蘭陵笑笑生について、今日では未だに定説となり得たものはない。笑笑生（作者）については、何人もの候補者があげられてきたが、蘭陵と結びつけ、納得のゆく説明をしたものは現われてはいない。作者に関しては、吳曉鈴、徐朔方両氏が、ともにあげる李開先作者説が一番説得力に富むように思われるが、李開先の出身地は山東章丘であり、両氏ともに、なぜ蘭陵か、との考察を十分に行つてはおられない。

蘭陵そのものについて述べた従来の研究はあまり多くないが、その一つ、戴不凡氏の『『金瓶梅』零札六題』（『小説見聞録』一九八〇年 所収）は、『金瓶梅』中に、『金華酒』が何度も出てくることから、蘭陵とは、吳下の金華、蘭溪一帯のことではないかと疑問を提しておられる。しかし、蘭溪を蘭陵という例はなく氏の説は、些か不自然の感をまぬがれない。氏はさらに、作品中に吳語が頻繁に使用されていることから、吳人が手を加えた可能性が強いとしておられる。これは、万曆本『金瓶梅詞話』に東吳（蘇州）の弄珠客の序がついていること、蘇州で出版されたとみられることを考えあわせると、十分に考えられる事である。但し、それはあくまでも手を加えたのみであつ

て、作者はやはり山東人とみなすのが妥当と思われる。何よりも、作品そのものが、山東を舞台にしている上に、相当に山東の事情に通じた人物の手になると思われるからである。

次に、魏子雲氏は蘭陵について、いくつかの考えを述べておられる。

まず、蘭陵は山東のみならず、江南常州（江蘇省武進県）にもあり、こちらを指す可能性もある事、笑笑生は山東人ではないかもしれぬ事を述べられた後、続けて、以下の如く興味深い説を述べておられる。（『論蘭陵笑笑生』『金瓶梅作者研究資料』天一出版社 一九八二年所収）
「山東の蘭陵が有名になったのは、荀子（蘭陵令に封じられ、この地で年老いて没した為であり、後人は蘭陵とい

えば、荀子が年老いたこの蘭陵を思い出すのである。荀子は性悪説の哲学者であり、『金瓶梅』の作者が描写しているのは、すべて性悪説を示すものである。作者が「蘭陵笑笑生」を筆名としたのは、あるいは「蘭陵」との地名により、荀子の性悪説によって世人を嘲笑していることを表わしたのではないだろうか。

氏の説は、確かに一つの考え方ではある。但し、『金瓶梅』が描写しているのが「性悪説」であるとの説は、些か疑わしい。作品の前面に表われているのは、あくまでも「因果応報」であって、温和な呉月娘は、それなりに、終りをまっとうするのである。又、西門慶の描写も複雑で、第五十六回では、貧乏な友人常時節に金を与えて、助けてやりさえする。悪人と単純に断定することはできないのである。また、その他の登場人物の性格もさまざまで、一がいに「性悪説」を表わしているとは断じがたい。

しかし、それとは別に、氏がここで提

出された、蘭陵は出身地そのものを指すのではなく、他に象徴的な意味があるのではないかとの視点は、注目に値する。氏の主張のポイントは、次の二点である。

- (1) 蘭陵は、山東のそれではなく、江蘇省武進の蘭陵をさす可能性もある。
- (2) 蘭陵とは、具体的な出身地を示すのではなく、何らかの偶意がこめられているのかもしれない。

以上二点は、蘭陵について考える場合に、避けて通ることのできぬ重要なポイントである。

(1)の、蘭陵は山東のそれをさすのか、江蘇省のそれをさすのか、との問題に関して、興味深い論文がある。それは、李錦山・齊沛両氏による、「賈三近は『金瓶梅』の作者に非ず」(文匯報、一九八三年五月三十日)である。両氏はこの論文中に於いて、『金瓶梅』の作者が賈三近である、との説を批判して、こう述べられている。

「『金瓶梅』の作者に関して、多くの人が作者は山東嶧^{えき}県の賈三近であると

みなしている。理由は、

- 一、地名：『詞話本』は、「蘭陵笑笑生」と署名している。蘭陵は山東嶧県にあり、作者は嶧県の人と思われる。

二、方言：魯迅はかつて、『金瓶梅』は、「すべて山東方言を用いて書かれている」"決して江蘇人の王世貞の作ではない"

といった。後人は多くこの説を踏襲している。

三、酒名：本の中に何度も「金華酒」が出てくる。近來、ある人が、この酒は嶧県の蘭陵より産すると認めた。作者は当然嶧県人であることに疑いはない。

以上である。

張遠芳は、『詞話本』の序は嶧県で書いたものであるとみなし、これをふまえて、『金瓶梅』の作者が嶧県人であるとの観点は、動かぬものとなった"とし、さらに続けて、この嶧県人とは賈三近である。としておられる。(『抱

『南史』八十二年第二期 「蘭陵笑笑生即明代嶧県文学家賈三近」われわれは、万曆丁巳年『金瓶梅詞話』の「欣欣子序」に、はつきりと、「吾友笑笑生」、結尾には「明賢里の軒に書す」とあるのを認めている。「明賢里の軒」とは、序を作った人物の具体的な地点を示している。では、明賢里とは一体どこにあるのであろうか。……（中略）……

『南史・梁本紀』に

「夏四月乙卯、至自蘭陵」

また、

「廢帝東昏侯……本名明賢」

とある。東昏侯は南蘭陵人であり、彼の故郷に「明賢里」との地名があらわれるのは、自然なことである。このことは、「欣欣子序」が武進一帯で作られたことを説明している。賈三近は武進に行ったことはなく、武進に住んでいる友人もいなかった。故に、「金瓶梅」を作ることとは不可能である。

(1) 沈徳符は『野獲編』で、『金瓶梅』

の作者は「嘉靖間の大名士」であると書いているが、賈三近は嘉靖にはまだ年少であり、進士にも及第していなかった。

(2) 賈三近の著作に詞曲の作がないことから、元明詞曲の知識が少ないと思われ、詞曲の引用の多い『金瓶梅』を書いたとはみなせない。

(3) 思想的に、世に入れられぬ恨みを抱いていた笑笑生とは異なっている。等をあげ、賈三近は『金瓶梅』の作者ではないと結論しておられる。

ここで、両氏は「明賢里」は東昏侯の故郷を指すと指摘しておられるが、この点は極めて重要であり、疑いのない事実と思われる。なぜならば東昏侯は「金蓮歩」の故事で有名な人物であり、『南史・齊本紀下・廢帝東昏侯』に、

「金を鑿ち、蓮華と為し、地に帖りて、潘妃にその上を行かして曰く、「これ歩歩蓮華を生ず」と。」

とあるからだ。つまり、東昏侯は潘妃、即ち潘金蓮の主人なのである。あるいは

は、元来、水滸伝の潘金蓮なる命名も、この故事にもとづいたものであるのかもしれない。さらに『南齊書』に、

「池水に跨り、紫閣諸樓觀を立て、壁上に男女私褻の像を畫く。」

とあるのがみえる。「明賢里の軒」とは、これをふまえている可能性も考えられる。

以上をみるに、明賢里が、東昏侯の故郷を指していることは疑いがないと思われる。そして、明賢里が江蘇省の蘭陵—南蘭陵を指すのであれば、笑笑生の蘭陵もやはり、南蘭陵を指すと考えるのが妥当であろう。なぜなら、筆名の笑笑生と欣欣子が対応している以上、蘭陵と明賢里も対応していると考えられるからである。では、これらの地名は、作者の具体的な出身地、本籍のありかを示しているのであろうか。あるいは何らかの偶意、故事をふまえた諧謔であろうか。そうだとすれば、蘭陵は、地名以外のどのような意味を表わしているのであろうか。実は蘭陵はある意味で、文人ならば誰でも知

西太后秘話

その恋と権勢の生涯

◆徳齡著／さねとうけいし
ゆう訳／西太后の波乱の
生をえがく一大伝記小説…
……………定価1500円

中国 歴史の旅

◆陳舜臣著／東山魁夷装画
五千年の歴史をもつ、広大
な中国の地へ案内する……
……………定価1200円

北京追想

城壁ありしころ

◆臼井武夫著／戦前の古都
の知られざる横顔を描く北
京横丁の思い出……………
……………定価1900円

わが 青春の日本

中国知識人の日本回想

◆人民中国雑誌社編／中国
各界の知日家19名が戦時下
の日本で過ごした日々を回想
……………定価1500円

燕京風俗

◆王羽儀画／端木蕻良詩／
内田道夫監修・題詩訳注／
臼井武夫解説／旧北京の風
俗を知るための恰好の大型
カラー画集。詳しい解説つ
き……………定価12000円

東方書店

最寄書店で・東京神田神保町1-3
出版部営業電話…………(03)233-1001

っているといえるほどに、有名であったのである。文学作品に表われた例をいくつかあげてみよう。

(1) 蘭陵の美酒鬱金香 玉腕盛り来る琥珀の光 (李白 客中行)

(2) 中山の宿醞 (長く醸した酒) を開くに賽り、蘭陵の高價を擡ぐを笑う。

(『看錢奴』雑劇 第二折 元曲選本)

(3) 蘭陵の美酒且つは沽うべし。(李開先『斷髮記』伝奇 第十四出)

つまり、武進県の蘭陵は、古来美酒の産地として有名であったのである。ちなみに『中日大辞典』には、『蘭陵酒：江蘇武進県の西方奔牛鎮より出る酒：味は甘い。〔曲阿酒〕ともいう』とある。

筆者は、『蘭陵笑笑生』とは、ペアになった冗談と考える。つまり、「美酒を飲み、笑いながら書いた」―真剣な創作ではない、戯作だ、との、作者の冗談であり、世間に対するいいわけではないだろうか。少くとも、『笑笑生』との筆名が十分にふざけたものである以上、その出身地たる蘭陵を、生身の作者の本籍のありかと考える必要はどこにもないのである。もちろん、これは一つの解釈にすぎない。とはいえ、「美酒を飲み、ふざけながら作品を書いた笑笑生」、「明賢里の軒―ポルノの館で序を書いた欣欣子」。かれらは(同一人物であれ、別人であれ)なんと『金瓶梅』にふさわしい二人であ

ることだろう。



(関西大学)